**須々田　龍介 （すすだ・りゅうすけ）**

**１、プロフィール**

詩人、画家。詩誌「北方詩風」などに色彩感覚に富む詩を発表した。東京在住の一時期、棟方志功と知り合う。戦後は詩作を離れ、絵画制作で恵まれた資質を発揮した。

＜生没＞

1901（明治34）年８月14日 ～ 1962（昭和37）年１月２日

＜代表作＞

詩集『夜の花』

＜青森との関わり＞

南津軽郡大光寺村（現平賀町）出身。青森師範学校卒業後、高等小訓導。後東京府で教職。戦後、帰郷して病没。

**２、作家解説**

1901（明治34）年８月14日南津軽郡大光寺村（現・平賀町）大字本町字北柳田91番地に生まれる。尋常小、高等小卒の後、1916（大正５）年４月青森師範学校へ進む。大正10年３月卒業後、母校の柏木高等小学校訓導となる。このころから本格的に詩作した。大正13年上京、東京府荏原郡第二荏原尋常小学校訓導を初めとして、終戦まで板橋区・中野区の小学校に勤務し、荏原郡や杉並区に住居した。

大正15年４月、八戸町（当時）でパストラル詩社設立同人だった後藤健次によって「北方詩風」が創刊され、龍介も同人となる。「北方詩風」には、後藤の他にもかつてのパストラル詩社同人が名を連ねている。龍介は、同誌に５、６編の詩を発表した。東京では特定の詩派に属さず、同郷の詩仲間、画家の棟方志功・松本満史（まんし）らと交際しながら詩作を続けた。龍介の詩の特長は、優れて色彩感覚豊かなことである。晩年、絵画に熱中したことと無縁ではない。

1928（昭和３）年９月１日、詩集『夜の花』を自費出版。「北方詩風」に発表した作品など25編の詩を収めたものである。『夜の花』には、国際的に知られた詩人野口米次郎の序があり、その序から龍介が日参して執筆を懇願したことが知られる。

 　昭和７年３月、弘前市馬屋町の三浦美末（みすえ）と結婚届出、６月長女誕生。

 　戦後、病いに倒れ大光寺村に帰郷。その後詩作せず、絵画を制作しながら世を過ごした。昭和37年１月２日、死去、60歳。

 　没後12年の昭和49年11月、青森市で「須々田龍介遺作展」（絵画）が開かれ画集『須々田龍介遺作集』が出版された。また、昭和50年１月２日、青森市北の街社から詩集『夜の花』が復刻出版された。

**３、資料紹介**

〇詩集『夜の花』

図書

1928（昭和３）年９月１日

182mm×133mm

唯一の詩集。野口米次郎の「序」の後に「自序」として７行からなる詩がある。本編は「螢」から「詩人」まで25編の詩を収録する。発行者（須々田）住所　東京都荏原郡六郷町406。昭和50年１月２日、青森市で龍介の弟英治を知る山田チツによって復刻された。